

応募にあたって知っておいて欲しいこと

応募にあたっては、所属先(地方競馬場の厩舎)を決めてからでも、あるいは決まっていなくても構いません。しかし、大切な人生の目標としてこれから進む道ですので、競馬社会を良く理解して応募して下さい。

1 騎手という職業

最近、競馬に関するゲームや雑誌で得た知識から、騎手という職業についてよく理解せず、単なる憧れで応募してくる人がいますが、プロ騎手は大変厳しい職業であることを認識してください。

毎年、入所早々教養センターの訓練・生活が辛いとのことで辛抱できず、騎手への夢を絶って退所する騎手候補生がいます。いわゆるホームシックやカルチャーショックもありますが、騎手になるという意志の弱さが一番の原因だと思われます。

事前に騎手という職業についてよく調べ、また周りの方と相談して応募することが必要です。

2 体重調整

騎手にとって体重調整は最も重要なことの一つです。当センターでの教育期間中、騎手候補生は年齢区分毎に規定体重が指定され、修了時の規定体重は49.0kgとなっています。そのために騎手候補生の中には毎日の食事を制限したり、ランニング等で体重調整を行ったりしている者もいます。候補生は2年間で2~4kgは体重が増加しますので、一時的に無理な減量をしてセンターに入所しても、体重調整に苦労し、結果的に退所に至るのが現実です。

3 起床時間

当センターの起床時間は午前5時半(夏期は4時半)ですが、競馬場では騎手は毎日午前2時頃から起床し、9時頃まで10数頭の競走馬の調教を行っており、仕事はかなりハードなものです。

4 修了生の感想文から(一部抜粋)

◆第97期騎手候補生H君(平成31年3月修了)

この2年間は振り返ってみるとあっという間だったと思うが、その時々、毎日が大変で長かったように感じる。特に最初の1ヶ月はつらかった。なれない生活、厳しい訓練、怖い教官、ほんとに大変だった。この1ヶ月を乗り越えたら楽しいこともたくさんあった。訓練では、技能審査が始まった。馬をうまくコントロールできずに何度も悩んだ。そのたびに、指導し励ましてくれた教官にとっても感謝している。青帽になり、競走の訓練も始まった。最初は姿勢を作っていると脚がガクガクになったり、コントロールできずに走られたりした。それでも、木馬に乗って姿勢を長時間作れるように練習し、徐々に軌道に乗り始めたときにケガをした。この時の2週間が一番つらかった。周りはいまうまくなっていき、自分は乗れないというあせりがすごくあった。それでもくじけず乗り越えられたことは、自分に必要な経験だったんだなと感じてい

る。オレンジ帽になって競走実習などの新しい訓練も始まり充実していた。青帽の時よりはコントロールできるようになり自信がついた。しかし、競馬場実習に行きその自信はくだかれ、自分はまだまだ未熟だと痛感した。

まだまだへたくそなので、常に向上心を持って上へ上へのし上がっていきたい。今まで自分をサポートしてくれた家族、調教師、教官、同期、訓練馬に感謝している。

◆第 97 期騎手候補生 T 君（平成 31 年 3 月修了）

教養センターに入所して 2 年が経とうとしています。体験入所の時に、正直 2 年もたないと思いました。でも、騎手になるという夢を叶えるために入所したので、やるしかないと思って生活しました。最初は、時間に追われる生活で毎日忙しい日々でした。訓練では、鑑上げや馬上体操などが毎日続き、毎日筋肉痛になりました。障害訓練では、最初は全く馬の動きについていくことができませんでした。競走訓練に入ってから、騎手になるという実感がわいてきました。最初は折り合いをつけて乗ることが難しく苦勞しました。訓練馬には、暑い日も雨の日も雪の日も訓練してもらい本当に感謝しています。競馬場実習では、現役の競走馬の攻め馬をして、センターの馬との違いがすごかったです。そして、競馬の世界の厳しさを知ることができました。騎手の毎日の流れはとてもハードだと思ったので、先輩騎手についていける体力をつけていきたいと思います。

教官の先生方、毎日厳しく熱心に指導してくださってありがとうございました。今まで応援してくれた家族や友達のおかげで、ここまで来ることができたと思います。いろいろな人に感謝して、みんなの期待を裏切らないように頑張っていきます。

今まで本当にありがとうございました。